

脊柱変形矯正の進歩

これまでに脊柱側弯症の手術方法は、脊椎インストゥルメンテーションの開発とともに発展し、Harrington 法、Luque 法、Cotrel-Dubousset 法などが行われてきたが、現在は 1995 年に Suk らが報告した Segmental pedicle screw 法が一般的となっている。当科では、カーブの大きさ・硬さに応じて、椎弓根スクリューを計画的にスキップする Skip pedicle screw 法を 2005 年から開始し、2008 年に脊柱変形に、2010 年に「Spine」誌に報告した。

また、手術支援機器として術中神経モニタリング、コンピュータナビゲーションシステム、ハイブリッド手術室、脊椎ロボットなどが発展し、難易度が高い脊柱変形矯正手術はより安全にできるようになってきている。脊柱変形矯正については、私は一つの考え方にこだわり過ぎず、幅広い情報をもとに一人一人に最適な治療法を選択することが肝要と考えている。

今回、「脊柱変形矯正の進歩」というテーマで特集企画の機会をいただき、国内の新進気鋭の脊椎外科医の先生方に執筆をお願いさせていただいた。思春期特発性側弯症手術の固定範囲選択、手術療法の進歩、Coplanar 法、早期発症側弯症手術の進歩（この分野は、最適な術式がいまだなく、今後の研究が待たれる）、重症心身障碍児の側弯症に対する手術治療、成人脊柱変形に対する術中 CT ナビゲーションを用いた側方経路腰椎椎体間固定術、矯正固定術の適応と合併症対策、頸椎変形の矯正固定、ナビゲーション支援下椎弓根スクリュー刺入、カスタムメイド脊柱変形矯正用インプラントと、現在のトピックについて網羅し、すぐに臨床の現場で役に立つ論文ばかりである。これから脊柱変形の手術を始めようとする脊椎外科の先生方、現在、脊柱変形の手術をしている脊椎外科の先生方、さらには一般整形外科医の先生方のお役に立つことができれば幸いである。

（高橋 淳）